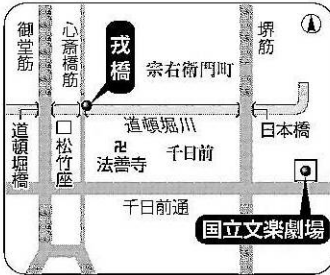


大阪・道頓堀

地震後、しばらく消えていたクリコのネオンが川面を照らした。夕刻、若者や会社員らの一群が心齋橋筋から戎橋に流れ込む。大阪・道頓堀。1枚の挿絵を頼りに、谷崎潤一郎がほれ込んだ芝居の街を探しに訪れた。



と美佐子が文楽の観劇で道頓堀を歩く場面に添えられた。絵筆を執つたのは、大阪で生まれ育ち、活躍した洋画家・小出楢重（1887-1931年）だ。

当時、この界隈は、弁天座、朝日座、角座、中座、浪花座といった芝居小屋が並ぶ道頓堀五座と呼ば

# ほれ込んだ芝居の街



谷崎と小出楢重について語る小出龍太朗教授（大阪市中央区の戎橋）

れ、文楽や歌舞伎、寄席を楽しむ客でにぎわった。関東大震災で関西に逃れた谷崎も、文楽に魅せられて劇場通いを始めた。そんな頃、千日前のダンスホールで楢重と出会う。交流が深まるなか、二つの才能は互いに影響を与え合った。「人物を詳細に描かず、読者のイメージに委ねる谷崎の手法は、楢重が挿絵や裸婦を描く時の特徴と重なる」と、楢重の孫、大阪芸術大の小出龍太郎教授（89）（フランス文学）は話す。

確かに、「夢喰う虫」の美佐子やお久の顔立ちほほとんど触れられていない。谷崎は登場人物にこうも語らせる。

「昔の人の理想とする美人は、容易に個性をあらわさない、慎み深い女であったのに違いないか

ら、この人形でいい訳なので、これ以上に特徴があつては寧ろ妨げになる」

谷崎は大阪で日本的な女性美を見たい。ちょうど、関西とその文化に傾倒する時期とも重なる。かつて頭から性に合わないと思つた文楽について、小説のなかで「独特であつて、このくらいよく



渡辺重子愛用の羽織

重子は、谷崎の妻・松子の妹で「細雪」の三女雪子のモデルとなった。京都の平安神宮に花見に行った際に愛用した羽織。落ちていた中にも華やかさが見られるデザインで、往時を彷彿とさせる。（井上勝博・芦屋市谷崎潤一郎記念館学芸員）

芦屋市谷崎潤一郎記念館（兵庫県芦屋市伊勢町12の15）で6月26日まで開催している春の特別展「四姉妹の昭和一よみがえる『細雪』の世界」で展示

考えてあるものはない」と称賛し、以前は「人間のほうはうも喰ひ物ほど上等ではないやうである」ときおろしていた大阪も、「入生活の定式」というものが今も一と通りには保存されている」と評価するようになった。

「仮面の谷崎潤一郎」を著した作家・大谷晃一さん（87）は震災の影響を指摘する。「昔ながらの東京は地震でつぶれてしまった。復興したモダンな東京が嫌になつた谷崎は、当時の大阪に、昔ながらの情緒を見つけたんでしょ」

だが、谷崎が好んだ道頓堀界隈もまた、戦災で失われる。五座の名を継いだ劇場は、戦後復活したものの、2008年にすべて消えた。今、戎橋に立つても、谷崎が愛した情緒は見えない。手元の挿絵を模写した銘板が欄干に付けられているだけだ。地元商店主らが道頓堀の歴史を語り継ぐために寄贈したという。

橋から南に下り、千日前通を東へ。国立文楽劇場をのぞいた。太夫の語りと三味線の音色に合わせ、人形遣いが、きらびやかな衣装に身を包んだ文楽人形を自在に操る。

客席には和服が目立つ。白髪を整えた老夫婦や、上品に着飾った女性たち。劇場は時に笑いに包まれ、人情話には涙ぐむ。谷崎が愛した芝居の街が、確かにそこにはあった。（坂本二郎）